

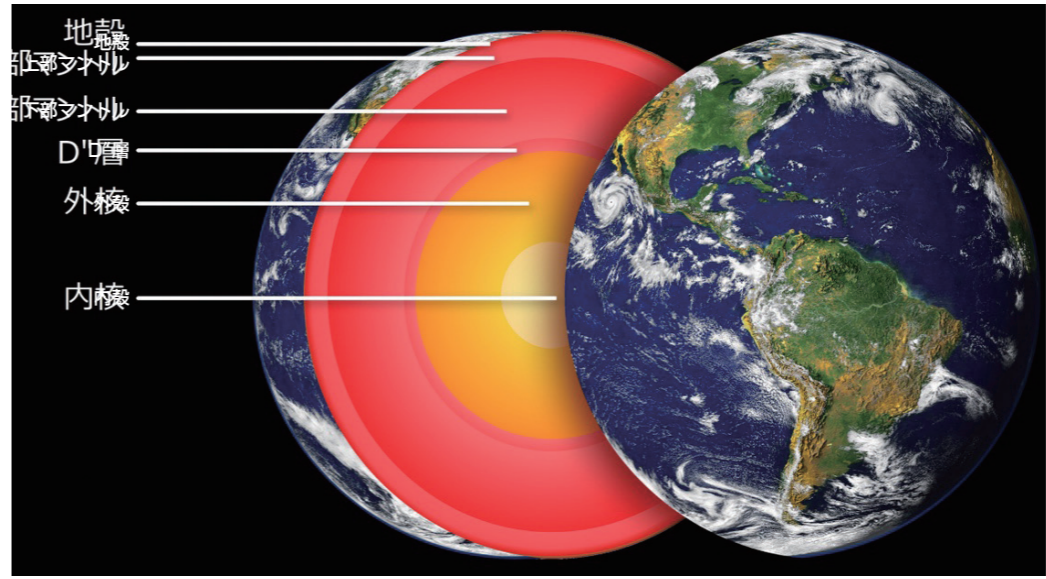
最新物理学で検証!!
北極に開いた異次元空間への扉は
実在する!!

地球空洞論の 超科学

中身の詰まった球形と思われていた地球の内部は空っぽだった？
そして、
われわれの世界と空洞世界を結ぶ入り口が南北両極にある。
その内部世界には
超人類による高度な文明が築かれている……。
17世紀イギリスの天文学者エドモンド・ハレーに端を発し、
4世紀後の今なお論じられつづけている
この「地球空洞説」は、
内部世界を訪れた幾多の人々の証言にも関わらず、
実際のところ、
荒唐無稽なものであることは否定できない。
だが、
現代物理学における多元宇宙論によると、
空洞世界||異次元世界は
実在するというのだ!!

プロローグ

地球の内部は、密か、それとも、空洞なのか？



地震波を分析して判明した地球の内部構造とは？

現代科学においては、地球内部の構造は地表面での観測で得るしかない。中でも最も優れた方法は地震波の分析である。それによると、地球は外側から岩石質の地殻、岩石質の粘性体IIマントル、金属質流体の外核、金属質固体の内核という大構造から成る。

↑科学的に確立された地球の構造。ちなみに「D層」とはマントルの最下部に当たる。
 ↓地球空洞論の先駆者、エドモンド・ハレー。



科学的に確立された地球の構造。ちなみに「D層」とはマントルの最下部に当たる。地球空洞論の先駆者、エドモンド・ハレー。

現代科学においては、地球内部の構造は地表面での観測で得るしかない。中でも最も優れた方法は地震波の分析である。それによると、地球は外側から岩石質の地殻、岩石質の粘性体IIマントル、金属質流体の外核、金属質固体の内核という大構造から成る。

これは部分的に溶融していると考えられる。上部の相対的に冷たく硬い層とは物理的に区別される。アセノスフェアの上部にあり、上部マントルの一部と地殻から成るこの層を岩石圏といい、十数枚のプレート(板)に分かれている。

地球のプレートには、大陸を含む大陸プレートと、海洋地域のみを含む海洋プレートの2種類がある。

海洋プレートは中央海嶺で造られ、マントル対流に運ばれて中央海嶺から離れる。その間にも中央海嶺では次々にプレートが造られるので、海洋底が拡大する。

大陸プレートは海洋プレートより相対的に軽いため、

海洋プレートが大陸プレートとぶつかるとその境界でマントル中に沈み込み、日本海溝のような沈み込み帯を造る。

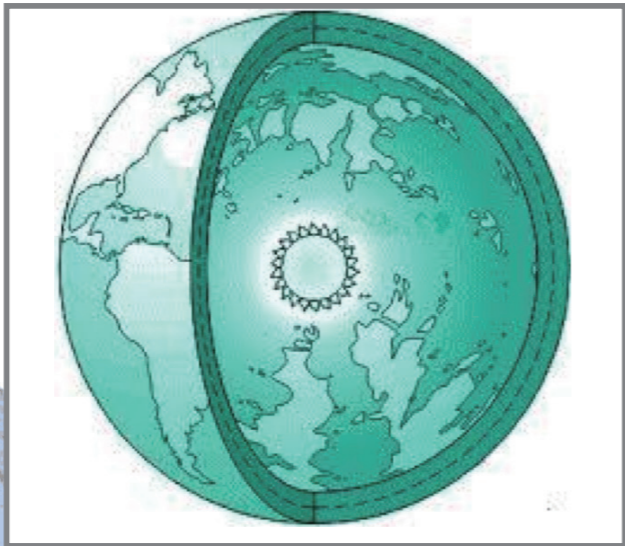
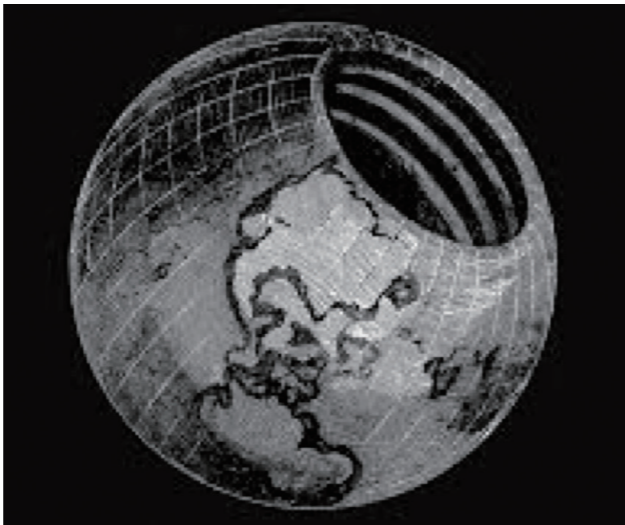
前述のように、プレートはマントル対流によって運ばれる。海溝を伴う海洋プレートはそうでないものより拡大速度が速い。これは、マントル対流の他に沈み込んだプレートに引っ張られる効果加わるためとされる。

地球の中心核IIコアは外核と内核に分かれる。外核の主成分は鉄とニッケルと推定されるが、水素や炭素などの軽元素を10パーセント以上含むとすれば、地震波速度と密度の説明がでない。

内核は地球内部の冷却に伴い、外核の鉄とニッケルが析出・沈降してできたと考えられ、現在でも成長が続いているといわれる。ただし、内核の環境である320万気圧では金属鉄はその性質上、固相を取るためとされる。

地球中心部の圧力は約400万気圧、温度は物質組成とエネルギー輸送過程に依存するため正確には不明だが、約5000〜8000Kと推定される。

また、対流や地球自転などに起因する外核の金属流体の動きによって電流が生じ、この電流により磁場が生じる



↑(上) シムズの空洞地球の概念図。(下) ガードナーの空洞地球の概念図。中心部に太陽がある。

さ500マイル(約800キロメートル)の地殻を有し、その内部には生命が生存可能とした。19世紀に至り、同説は多くの大衆の関心を引いた。

そして、アメリカの陸軍大尉ジョン・クリップス・シムズ(1779〜1829)が、一連の考察を行った。

シムズは地球が5層の同心球から構成され、直径1400マイル(約2240キロメートル)に及ぶ開口部が北極と南極に開いていると主張した。さらに、アメリカの著述家マーシャル・B・ガードナー(1854〜1937)が同説を取り上げ、著書で理論を展開した。それによると、地球は800マイル(約1280キロメートル)の厚さの球形の地層と内部空間の中心に直径600マイル(約960キロメートル)の太陽を有する構造となっている。

内部は生物の生存が可能だといふ。彼はまた、両極の開口部は水に閉ざされているが、北極圏の先住民が本来地球内部に住んでいたという伝説を有し、マンモスの凍った死体がロシアのシベリア地方で発見されたことなどが、空洞地球の証拠であると述べている。

第1章以降でも述べるが、今日稼働する人工衛星の画像で両極の子細を見ても、開口部の明確な確認はできていない。しかしながら、地球内部へ旅したという人々は少なくないのだ。

と考えられている。これが地球磁場だ。このように地球の力学的な運動と結びついた磁場発生・維持機構を「ダイナモ機構」という。

マントルは珪酸塩鉱物であり深さ約2900キロメートルまで存在し、地球の体積の83パーセントを占める。全体の化学組成は、必ずしも判明していない。上部マントルは、かんらん岩または仮想的岩石のパイロライトから成

るとする考えが主流だが、下部マントルについては輝石に近い組成とする説もあり、定説がない。

マントルは核によって暖められ、また自らの内部にも熱源を持つ。そのため固相のマントルはゆっくり対流しながら熱を地殻に運ぶ。地殻に近い位置では対流は起こらず、地殻と一体化するような動きをしており、プレートテクトニクス、という水平運動を起こす。

ように見える。また地震学者は地震活動に特有の奇妙な現象を観察している。地震のたびに震動が継続し、地殻に共鳴が起きるのだ。低周波すぎて人の耳には聞こえないが、巨大な鐘のように地球が共振するのだ。これらについて専門家は答えられない。

だが、こうした問題は、地球が空洞であると考えれば解決する。そのため「地球空洞説」は何世紀にもわたって、人々の関心を集めてきた。

最初に地球空洞説を唱えたのはイギリスの天文学者エドモンド・ハレー(1656〜1743)。彼は地球が厚



地球が擁する矛盾を解消する、空洞論

現代科学による大まかな地球像につ

いて簡単に解説した。だが、これだけ

地球空洞論の超科学

現代科学による大まかな地球像について簡単に解説した。だが、これだけ

最初に地球空洞説を唱えたのはイギリスの天文学者エドモンド・ハレー(1656〜1743)。彼は地球が厚

第1章 空洞世界への旅人と北極探検家たち



水中のトンネルを通じて巨人の国を訪れた親子

空洞世界に関する伝説は、古くから世界各地に残っている。

古代ギリシアには、ヒュベルポレイオス（北風の彼方に住む民族の意）という神話があり、チベットにも地底王国「アガルタ」に関する伝説が存在する。ロシアの画家ニコライ・レーリッヒ（1874～1947）や、ナチスドイツがこれらの地の探索を行って



↑ギリシア神話に伝わる北方の民族ヒュベルポレイオスが住むとされる温暖な地域の古地図。北極を中心として描かれている。

奇妙な風景は数日間続き、やがて水平線が見える通常の海に戻った。だが、やはり何か違う。太陽が妙に赤いし、海自体もこれまでの海とは異なる感じがした。違

和感を覚えながらも、親子が船を操縦していると、目の前に巨大な船が現れた。親子は助けを求めようと船に近づいたが、乗組員たちを見て驚いた。全員、身長が4メートル以上もあるのだ。

しかし、怯えるふたりに、巨人たちは友好的で親切だった。そして、これから自分たちの国に案内するという。巨人たちの言葉はサンスクリット語に似ており、かすかに理解できた。この後、ヤンセン親子が連れていかれたのはエヒウという都市だった。

朝夕には燃え立つような赤色で、日中は美しい白色のモーキー・ゴッド。この世界の太陽は、地球内部の巨大な空間の中央に浮かんでいた。その下で平均寿命が約800歳という巨人たちは高度な文明を築いていた。都市には親子が初めて見る機械が数多く存在した。建物は黄金で彩られ、農作物も豊富で、すべてが巨大だった。

やがて親子は、首都エデンにある宮殿へ連れていかれた。その際の乗り物は、電気的な仕掛けで一本のレールの上を走るものだった。そして、宮殿の大広間の荘厳な雰囲気の中、この内部世界を統治する最高指導者の前に立った。親子は彼から滞在許可をもらい、

2年ほどこの国ですごすことになる。

エデンには4つの川の源となる巨大な泉があった。この場所は住民たちに、地球の中心、などと呼ばれていた。川の名前はユーフラテス、ビシオン、ギホン、ヒテケルだった。内部世界の陸地は地表の約4分の3で、残りの4分の1が水域だった。気候は高温多湿で毎夕、霧が大地から立ちのぼり、毎日一度は雨が降った。

2年余りが経過し、親子は外部世界に戻る決心をする。旅立ちに際して巨人たちは、金塊とこの地底世界の地図を土産に持たせてくれた。

親子は元の漁船に乗り込み、地底世界の海に出た。風は南側に吹いていた。つまり、北の開口部から吹き、南に流れていくようであった。

旅の途中でふたつの大陸を隔てる狭い海峡を通り抜けた。やがて外気温が下がり、流水が見えてきた。コンパスは北の開口部から入ったときと同様、フラフラと方向が定まらない。

やがて水のトンネルを抜け、親子は元の世界へ戻ってきた。ところが、そこは北極ではなく、反対側の南極の海だった。親子は途方にくれた。ノルウェーに帰るには長い旅になるが、この



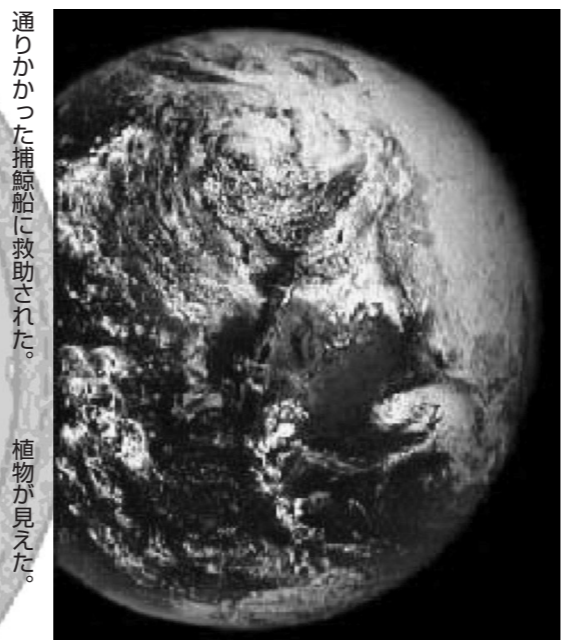
↑地底世界の巨人たちとヤンセン親子。(左) 親子が訪れた世界の想像図。

まま航海するしかない。だが、嵐というさらなる不運が親子を襲う。船は破壊され、父親は船や巨人たちの土産とともに、海に沈んだ。息子のオラフは、冰山に乗って漂流しているところを、



巨人たちは失われた文明の末裔だった？

実はヤンセン親子に限らず、北極海で同様の体験をした船乗りが何人もいるという。親子の体験とほぼ同時期に他にも3件ほど酷似した事件が発生している。また、南極海においても同様の事件が起こっている。さらに、ノルウェーの漁村などではこうした体験談が昔から伝わり、また船乗り自身の手記としても残っている。一例として北



↑アポロ11号が捉えた地球の映像。北極部分に開口部らしきものがある。その海から、彼らは大きな山のようなものを見た。山に向かうと海はなく、彼らは地球の中に向かうらしき巨大な深谷を航海していた。両岸には多数の動

通りかかった捕鯨船に救助された。ヤンセン親子の体験したこの事件は、だれも信じず、結局、妄想ということにされ、その後オラフは28年もの間、精神病院ですごしたのであった……。

方人種の末裔という男がアメリカの医師に次のような体験談を話している。——男はノルウェーの北極圏付近に住んでいたが、ある夏に友人とともに漁船で北方に旅行することした。1か月分の食料を漁船に積み、ふたりは北極点を目ざした。約1か月の航海後、彼らは北極の彼方の不思議な海域にたどり着いた。極地なのに暖かいのだ。

植物が見えた。

さらに進むと奇妙な国に到着した。そこでは地球上に比べて何でも大きく見えた。そしてふたりは親切な巨人たちに出会った。巨人たちは地上の人間と同様に家に住み、移動にはモノレールに似た乗り物を使っていった。彼らはふたりを家に連れていき、食事を出してくれた。食材はどれも大きく、ブドウもひと粒の大きさが表世界のモモくらいあった。そして、果物も野菜も地上とは比較にならないほど美味なのだ。ふたりは約1年間、巨人の国に滞在したが、そこで見たのは珍しいものばかりで、科学技術も非常に発達しているようだった。

ふたりが表世界に帰るとき、巨人た

ちは必要なものを準備してくれた。なお、彼らはアトランティス大陸の生き

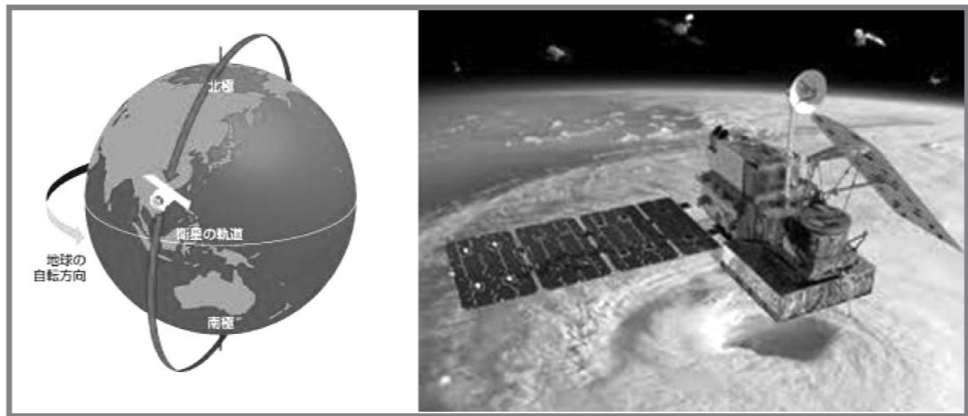
残り、大陸が海に沈む前に地球内部に住みついたという。



穴が確認できなくても未知の陸地は存在する？

それにしても、北極に地球内部に通じる穴が本当に開いているのだろうか？ 実は近年、それらしきものが衛星によって何度か撮影され、話題を呼んだ。

たとえば1967年1月6日、アメリカの商務省環境科学サービス局(当時)が打ち上げた気象衛星エッサー3号が、北極と南極に穴らしきものを



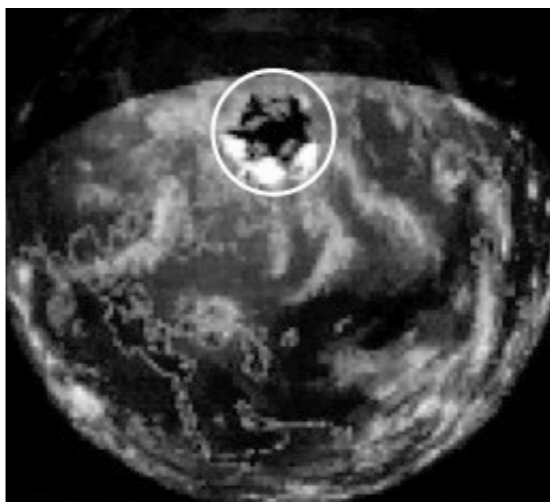
↑極軌道衛星UWマディソンの軌道。(右) UWマディソンのイメージイラスト。
←極軌道衛星が捉えた北極付近の映像。丸で囲まれた部分が温度の高い。

また東西冷戦中、原子力潜水艦の航路として、アメリカ本土に近い北極海の海底の形状が調査されたが、そうした開口部は発見されていない。

ちなみに、地球空洞説を信じる人々は、北極の開口部の発見が困難な原因として、以下の主張をする。

- ①開口部が極点ではなく、それから離れた位置にある。
- ②開口部はそれほど大きくないため、上空から確認しにくい。
- ③現在の軌道上からの衛星写真が故意に修正されるか、隠蔽されている。

だが、こうした否定的事実にも関わ



初めて撮影し、続いて1968年11月23日、同じく気象衛星エッサー7号が鮮明な、北極の穴、を撮影した。

それだけではない。1969年にNASA(アメリカ航空宇宙局)の宇宙船アポロ11号から撮影された地球の映像で、北極付近に開口部らしきものが写っており、当時、地球内部への開口



北極点を目指す命知らずの探検家たち

北極点到達を目指した探検の最初のひとつが、イギリス海軍少将ウィリアム・エドワード・パリー(1790~1755)率いる探検隊であり、北緯82度45分にまで達している。その後も各国の探検隊によって北極探検が何度も行われ、未知の陸地の存在について調査が重ねられてきた。

そして、アメリカの探検家ロバート・ピアリー(1856~1920)は、かつてグリーンランドにおいて黒い塵が大量に降下するのを体験し、これが未知の土地からの火山塵かもしれないと考えた。

さらに幾人かの探検家は、実際に北極付近で広大な土地を見たことを報告している。これらは1811年にロシア、ノボシビルスク諸島北西部で発見されたサニコフ島や、1906年にカナダ、アク

部の証拠として注目された。ただし、その後、これはアラスカ沖に発生した大きな低気圧の目であることが判明している。以後、地球内部への入り口は確認されないままとなっている。

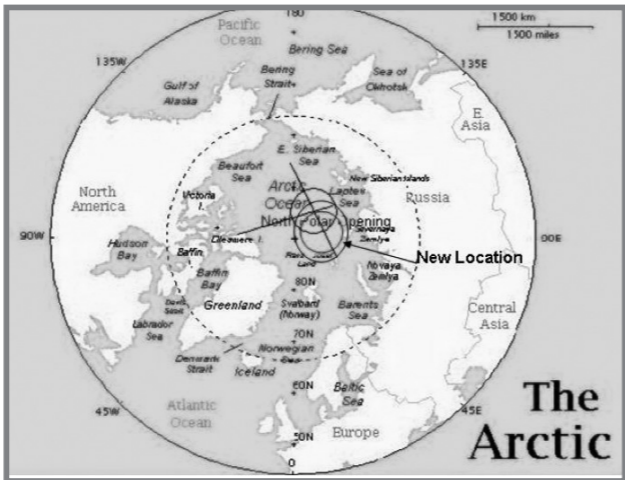
だが、実際は過去において、北極地方の探検家等により、未知の陸地が存在するらしい事実が指摘されている。

セルヘイベルグ島北部で発見されたクローカー・ランド等による報告である。

また、北部アラスカやシベリアを探索した人々は、動物の遺骸だらけの広大な堆積地帯を発見している。自然に育つ樹木がまったくないこの極寒地帯に、凍結した骨が樹木とともに大量に埋まっているのだ。この環境で動物が生存することは不可能であるにも関わらず、である。骨の中には絶滅種のものも混じっていた。例えばマンモス、マストドン、巨大バイソン、それにウマ科に属する特殊な種の骨である。

これらの堆積がシベリア、アラスカ、さらにその北方の島々に広がっていた。マンモスの冷凍死体の胃の中には、より南の温暖な気候でないと育たない草などの植物が含まれていた。

避れば、フランドル(現ベルギー)の地理学者ゲラルドゥス・メルカトル



↑UWマディソンの画像から、筆者が推定した北極の開口部の推定位置(二重円内)。



↑ミールから撮影された北極の開口部と思われる画像。蒸気が噴出していることがわかる。

北極付近に温度が周囲の場所と明らかに異なる部分があることがわかる。これが北極の開口部か？

しかし、それは視覚的にはつきりとはわかる大きなものではない。また、南極については穴らしきものは認められない。

だが、北極付近には、南極には認められない可視光線の黒い影の部分とほぼ同じ位置に、温度が周囲と異なる部分が存在するのだ。このことから、黒い影の部分が地球の開口部の位置と重なり合っている可能性もある。

他の極軌道衛星のデータもチェックしたが、結果はほぼ同様だった。この開口部らしき部分の位置は、筆者がUWマディソンの衛星写真から推定したところ、経度82°、緯度80°N。

これはまた、極地探検のデータによる推定位置とほとんど一致する。さらに、最近の衛星による北極の温度分布の計測結果ともほぼ一致していると思われる。すなわち、周囲に対して温かい部分があり、そこが地球の開口部に当たると考えられるのだ。これらから、経度82°、緯度80°Nに北極の開口部が存在する可能性は高い。ただ、開口部は北極点から見るとロシア側に位置し、そのサイズも小さいことがわかる。

1986年2月19日に打ち上げられ、2001年3月23日まで運用された旧ソ連の宇宙ステーション、ミールから撮影された画像も公開しよう。光を放つ穴から水蒸気が噴出していることがわかる。これが北極の開口部だとすれば、穴からの光はもしかすると内部太陽が放射するものかもしれない。

なお、アポロ11号が撮影した北極の開口部の画像が低気圧であることは前述した。だが、NASAは1980年代にすでに地球内部に通じる北極の穴について認識し、その地形図を作成していたという情報もある。

——このように宇宙から見たとき、シベリア付近の北極地域に何か、常識に反する場所、が存在することがわかる。そして、この場所が開口部から実際に地底に広がる異世界を探索したという人物がいるのだ。

(1802~1594)が1569年に作成した世界地図には、なぜか、北極大陸が描かれている。この大陸には『スモーキー・ゴッド』に出てくる4つの川もある。メルカトルはどこからこの川に関する知識を得たのか？ これらを総合すると、未知の陸地または地球の開口部は確かに存在する。ただ、その位置は極点でなく、ヤンペリア側に位置していると推測される。

しかし北極探検隊の報告にも関わらず、現時点では極地を人工衛星により撮影した写真の結果から、陸地または開口部らしきものは確認されていない。

また東西冷戦中、原子力潜水艦の航路として、アメリカ本土に近い北極海の海底の形状が調査されたが、そうした開口部は発見されていない。

ちなみに、地球空洞説を信じる人々は、北極の開口部の発見が困難な原因として、以下の主張をする。

- ①開口部が極点ではなく、それから離れた位置にある。
- ②開口部はそれほど大きくないため、上空から確認しにくい。
- ③現在の軌道上からの衛星写真が故意に修正されるか、隠蔽されている。

だが、こうした否定的事実にも関わ

しかし、それは視覚的にはつきりとはわかる大きなものではない。また、南極については穴らしきものは認められない。

だが、北極付近には、南極には認められない可視光線の黒い影の部分とほぼ同じ位置に、温度が周囲と異なる部分が存在するのだ。このことから、黒い影の部分が地球の開口部の位置と重なり合っている可能性もある。

他の極軌道衛星のデータもチェックしたが、結果はほぼ同様だった。この開口部らしき部分の位置は、筆者がUWマディソンの衛星写真から推定したところ、経度82°、緯度80°N。

これはまた、極地探検のデータによる推定位置とほとんど一致する。さらに、最近の衛星による北極の温度分布の計測結果ともほぼ一致していると思われる。すなわち、周囲に対して温かい部分があり、そこが地球の開口部に当たると考えられるのだ。これらから、経度82°、緯度80°Nに北極の開口部が存在する可能性は高い。ただ、開口部は北極点から見るとロシア側に位置し、そのサイズも小さいことがわかる。

1986年2月19日に打ち上げられ、2001年3月23日まで運用された旧ソ連の宇宙ステーション、ミールから撮影された画像も公開しよう。光を放つ穴から水蒸気が噴出していることがわかる。これが北極の開口部だとすれば、穴からの光はもしかすると内部太陽が放射するものかもしれない。

なお、アポロ11号が撮影した北極の開口部の画像が低気圧であることは前述した。だが、NASAは1980年代にすでに地球内部に通じる北極の穴について認識し、その地形図を作成していたという情報もある。

——このように宇宙から見たとき、シベリア付近の北極地域に何か、常識に反する場所、が存在することがわかる。そして、この場所が開口部から実際に地底に広がる異世界を探索したという人物がいるのだ。

第2章

空洞世界の訪問者バード海軍少将の功罪



北極圏に出現した緑の谷とマンモスの姿

リチャード・イヴリン・バード(1888~1957)は、アメリカの軍人である。海軍少将で何度も南北両極の探検を行い、1926年5月9日に航空機による初の北極点到達を成し遂げたことでも知られる。いわば国民的英雄である。実際、1939年から1950年まで、彼は5度にわたる南極調査において指揮を執っているのだ。



↑極地に展開されるハイジヤンプ作戦。
←リチャード・イヴリン・バード少将。

1946~1947年に、アメリカは、ハイジヤンプ作戦を実施した。南北両極の調査を目的とした作戦だ。これにも参加した少将だったが、彼には以前から気になることがあった。それは北極の彼方に温暖な地があるという噂だった。それを確認すべく、少将はアラスカ基地を出発した。予定では北極点上空を通過して、そのまま連(現ロシア)側に2700キロメートル(約2700キロメートル)ほど飛んだ後に、帰投するはずだった。だが、そうはならなかった。少将は北極で驚愕の出来事に遭遇したのだ。以下、当時の彼の日記から抜粋する。



北極ベースキャンプ、1947年2月19日出発。
09時10分||眼下の雪と氷が多少黄色味を帯びている。コンパスが回転しはじめ、位置計測ができない。太陽コンパスを使うと操縦はなんとかなった。だが風景に問題がある。眼下に氷がない。09時15分||遠くに山脈のようなものが見えてきた。

09時49分||山脈への飛行時間を記録する。これは幻覚ではない。
09時55分||高度2950フィート(約880メートル)。強い乱気流に遭遇。10時00分||山脈の上を飛行中。川らしきものと緑の谷が見える。いや、北極のここに緑があつてはいけぬ。異常だ。ここに雪と氷以外があつてはいけぬ。だが、山の斜面に森が見える。10時05分||谷を調べるため、高度を1400フィート(約420メートル)に下げ左折。この緑はコケか堅いタイプの芝生に見える。そして、光が他と違う。太陽はすでに見えない。さらに



虹色に輝く都市で少将を待っていた人物

機体のエンジンが止まった。機体は何かの制御下にあるようで、それ自身

で周りはじめた。
11時40分||われわれの乗機が着陸体勢



↑いずれもバード少将が目撃した、北極の地下に広がる世界。下は緑地を歩くマンモスの親子。

得ない。私たちは今まで、あなたたちの戦争や野蠻な行為に干渉しなかつたが、もはやせざるを得ない。あなた

年以降、私たちはあなたたちに接触を試みた。だが、その努力は敵対行為によつて迎えられ、私たちの航空機は攻撃され、戦闘機に憎悪をもって追跡されたのだ。今や大きな嵐が表世界に起こりつつあり、近未来に狂乱が起きるだろう。あなたたちには解決策がない。全人類は巨大な力オスに飲み込まれるだろう。今回の大戦は、人類を襲つものの前兆だった。私は間違つたことをいつているかな?」

私は「何をすればいいのか?」と、代表者に問うた。代表者は

「あなたたちはもはや後に引けない段階にまで来ている。あなたたちの中には権力を放棄することより、世界を破壊したがつている者がいる。1945

「あなたたちはもはや後に引けない段階にまで来ている。あなたたちの中には権力を放棄することより、世界を破壊したがつている者がいる。1945

のとき、戦争の不毛さを悟り、以降はあなたたちの文化も科学技術も一新されるはずだ。あなたはこのメッセージを持つて表世界に帰りなさい」

「あなたたちはもはや後に引けない段階にまで来ている。あなたたちの中には権力を放棄することより、世界を破壊したがつている者がいる。1945

のとき、戦争の不毛さを悟り、以降はあなたたちの文化も科学技術も一新されるはずだ。あなたはこのメッセージを持つて表世界に帰りなさい」

「あなたたちはもはや後に引けない段階にまで来ている。あなたたちの中には権力を放棄することより、世界を破壊したがつている者がいる。1945

のとき、戦争の不毛さを悟り、以降はあなたたちの文化も科学技術も一新されるはずだ。あなたはこのメッセージを持つて表世界に帰りなさい」

に入った。目に見えないエレベーターにでも乗っているように降下・着陸。11時45分||数人の男性がこちらに歩いてきた。長身でブロンズだ。遠くに虹色に脈動して光っているように見える都市がある。男性たちは武装はしていないようだ。彼らがドアを開けるように指示したので、応じた。私と無線技士は小さな車輪のない乗り物に乗せられ、都市に移動した。都市はクリスタルに似た材料で造られているように見えた。巨大な建物に到着。その後、私は指示のまま、無線技士を残してエレベーターらしきものに乗って下った。ドアが開くと、私は壁全体がパラセに照明された通路を進んだ。大きなドアの前で立ち止まるとそれが開き、中に入った。ホストのひとりがいった。

「マスターがあなたに話したいことがあるぞうだ」
マスター||代表者は長い年月を顔に刻んだ細く繊細な人だ。彼は語った。「あなたを招いたのは高潔な人格で、地球表面の世界では有名だからだ」
地球表面の世界? 私は驚愕した。「そつだ。あなたは今、地球空洞内にいる。あなたの使命が遅れることがないように、後であなたたちを安全に地球表面まで送ろう。だが今、あなたがなせここに招かれたかを話す必要がある。私たちの表世界への関心は、あなたたちが日本に原爆を落としたことから始まった。それは非常事態であり、私たちは航空機を表世界に飛ばし、あなたたちがしたことを調査した。むしろ今では過去のことだが、話さざるを得ない。」



代表者のメッセージ||警告はアメリカ政府に届いたか?

会見は終わり、私と無線技士は乗機に戻った。私はエンジンをスタートさせ、飛び立つ準備をした。ドアが閉まったとたん、機体は見えない力で押し

戻った。私はエンジンをスタートさせ、飛び立つ準備をした。ドアが閉まったとたん、機体は見えない力で押し

上げられ、瞬時に高度2700フィート(約810メートル)まで達した。彼らの航空機が2機、エスコートした。14時15分、彼らからメッセージ。「私たちはここで引き返す。機体のコントロールは復旧している」

14時20分、われわれは再び広大な氷と雪のエリアの上でいた。ベースキャンプから約27分のところで無線連絡を試みた。それは通じ、応答があった。すべてが正常である旨、伝える。

15時、ベースキャンプに着陸。

後に私はペンタゴン(国防総省)に出頭し、代表者からのメッセージを伝



↑一行が訪れた虹色に脈動してきらめく都市のイメージイラスト。バード少将はここで地下世界の代表者と会った。

↓バード少将が地下世界で目撃した謎の航空機。

える。その結果、しばらくの間、国家安全部門の厳しいコントロール下に置かれ、見たものすべてに沈黙を守るように命令された。信じられない。

——バード少将は日記の最後に、次のように記している。

「長い極地の夜が終わわり、真理のまぶしい日の光がまた訪れ、暗黒は光に変わるように、私は極地の彼方の国を見た、あの偉大なる未知の中心を」

ちなみに、この少将の北極探検とはほぼ同時期、アメリカのデヴィッド・ブロンガー少佐が南極で、後に、ブロンガー・オアシスと呼ばれることになる場所を見つけている。彼はシャクルトン氷床付近を飛行していたとき、海岸線から約4マイル(約6.4キロメートル)のところに氷のない水域が点在す



るのを見たのだ。水域は湖はどれも長辺が3マイル(約5キロメートル)以上あり、水温は海より高かった。オアシスの周りは氷の壁で閉ざされていた。このような水域の存在は、南極の開口

部が近くにあることの証明であり、そこから暖かい風が吹いてくると考えられた。また、このエリアはあまりにも広大なため、火山活動でできたものではないと思われる。

撤退を余儀なくされた新たな南極探検とは？

少将はハイジャンプ作戦後のほぼ同時期に、ディープフリーズ作戦(1955~1956年)と銘打った南極探

検も試みている。そして、このときも異世界に入り、円盤型航空機と遭遇した。以下は当時の日記の概要だが、実はこのときの日は明確ではない。ともあれ、少将に内部世界に侵入した際の驚きが少ないため、北極から侵入したときより後であることは確かだろう。

——2月5日(おそろく)、少将は60人の搭乗員とともに8機の大型機で南極を目指した。

16時20分、マクマード基地(アメリカの南極観測基地)を出発し、谷の端に到着。斜面に沿って降下。斜面は最初はまだ暗いが、やがて急になる。

16時30分、氷が薄くなり、岩肌が見え出す。外気温はマイナス60度からマイナス10度まで上昇。

17時、依然、斜面を降下中。岩肌の随所に黒いものが見える。石炭か何かだろう。太陽は空に輝いている。外気温

はさらに上昇。谷底は熱帯か？

17時30分、高度計によると、谷を約1マイル(約1.6キロメートル)降下したようだ。斜面の飛行距離は約300マイル(約480キロメートル)か。18時、氷が完全に消滅。垂直になった巨大な穴に行き当たる。コンパスは機能しない。旋回しつつ降下。太陽は輝いているが、次第に暗くなっていく。

19時、穴の中を約1時間降下。外気温はさらに上昇中。数分前に小さな滝のそばを通過。写真を撮る。

20時、地面が水平な場所に着いた。コンパスは依然、機能しない。高度計はゆっくり降下したことを示している。計器で見ると時速約50マイル(約80キロメートル)。なぜこんなに遅い。

21時、穴の上縁から約1000マイル(約1600キロメートル)は降下したようだ。燃料が半分になったので、空のタンクを捨てる。タンクは壁側の地面に吸い寄せられるように水平方向に落ちていく。残りの燃料で地表に帰れ



↑ディープフリーズ作戦遂行のため、南極のマクマード基地を飛び立つバード少将の編隊。

るのか？ 帰投して次回に備えるべきか？ 無線は依然、通じず、応答なし。

22時、帰投決定。降下時より早い速度で上方に飛行する。水平の地面上を飛んでいるようだ。

23時、上縁付近に近づいたようだ。穴の直径を知るため、右のほうに飛行する。外気温は下がり、寒さが増す。

00時、1時間ほど飛行して飛行を始めた場所に戻る。穴の直径は100マイル以上か？ 搭乗員たちは地底の岩の多くの穴から水蒸気が立ちのぼり、雲のようになっていると報告。

01時、穴を抜け、山の斜面を上昇。途中、生命や植物が存在する兆候を探さしつつ撮影。上昇するにつれ氷の厚さが増す。

02時、谷の上まで達する。北の方向に太陽が昇るのがかるうじて見える。この季節だと太陽はほぼその位置だ。

03時、頂上を横切り、最終的にナジが漏斗状の穴の大きさを約500マイル(約800キロメートル)と計算。これから基地および空母に向かう予定。そこでUFOの編隊が接近。UFOの円盤型航空機の機体にはナチス・ドイツのハーケンク

ロイツのマークが見えた。これらは、敵対行動もたら

す、無線連絡もしない。カメラマンがこれを撮影。

13時、空母に問題なく着艦する。——バード少将の乗機の時計によると、このときの飛行時間は31時間。だが、空母の時計によると、少将らは23時間にわたって行方不明だったようだ。

着艦後、少将はオーストラリアのシドニーを経てワシントンへ。ペンタゴンでハリ・S・トルーマン大統領等出席者に撮影した映像を見せる。会議の結果、再び南極の穴を探査し、ナチスの基地を突きとめることが決定した。

翌年の2月16日、少将は8機の武装済み爆撃機で南極へ。ただし、大統領命令により空洞世界で遭遇したナチスの航空機に対する発砲は禁止された。そして一行は穴の開口部に突入、地底世界に到達した。海と山は地球内面に接しており、その間の空間は雲と光で満たされていた。霞かかった火の玉が中心に宙吊りになっているのが見える。地底における光と熱の源は内部太陽である。凹面の空間内に大陸が広がっているのも確認できた。この眼下の

パニック状態に陥った少将は大統領命令を忘れ、飛行士らに発砲準備の命令を出してしまった。その直後に前方

戦うべきか否か……？バード少将の選択

の僚機が円盤型航空機が発したレーザ

ーらしき光線で木端微塵に破壊された。同時に、地上に隠された対空砲らしき



武器から赤い光線が発射された。その



光を照射された機は制御を失ってエンジン停止、搭乗員らはパラシュートで次々と脱出した。そのとき、あのドイツ人の声が再び無縁に割り込んできた。「少将、あなたは愚かだ。警告にも関わらず部下を犠牲にした。ここから出ていき二度と戻ってくるな。今すぐ立ち去れ」。その言葉に少将はさらに動揺した。副操縦士が操縦を引き継ぎ、爆撃機を表世界に導く開口部に向けた。一方、地上ではドイツ人による生存アメリカ兵26名の救出作業が行われていた。ドイツ人たちは、生存兵に友好的な領土内にいることを説明し、彼らを武装解除した。重傷者を除いた生存兵は市内に連行された。標識には「ニューベルリン」とある。捕虜たちは1940年初めに建設されたというこの都市で、

ドイツの有名建築家が設計した建築物を見学し、食事をふるまわれた。その後、ホテルに収容された。翌日、死亡した搭乗員たちの葬儀が市内で行われた後、捕虜たちは空港に移動した。空港では5機の円盤型航空機が待機していた。棺に納められた搭乗者の遺体は、別の航空機に乗せられた。指揮官のルードビッヒ將軍が先導機に乗り、飛行隊は開口部から南極に出た。そしてオーストラリアに向かい、無線でシドニーの南西洋上にいるアメリカの空母と交信し、甲板の一角にドイツの航空機を着艦させ、捕虜の引き渡しをすることで合意した。

「今回のことは私たちの力を示しただけだ。今後は武装した探検隊を送るな。さもなければ、私たちはホワイトハウスやワシントンに5分以内に戻ることができる。もしそちらが望むなら戦わざるを得ないが、新ドイツ帝国はアメリカとの平和を望んでいる。真の敵はソ連だ」

実はソ連も今回のバード少将の南極での探検について知り、100機以上の武装した航空機を北極の開口部から侵入させている。そして、空洞世界への入り口の守護者であるバイキングの末裔（ドイツ人は「古き種族」と呼んでいる）と出会った。ソ連の飛行編隊は最初、古き種族に制止されたが、新ドイツ帝国に行くことを伝えた後、通過を許された。だが、この侵入は新ドイツ帝国を激怒させた。そして、空洞

参考文献=Geoff Douglas/Admiral Richard E. Byrd's Missing Diary.A Flight To The Land Beyond The North Pole Into The Hollow Earth/Zohar Press/2017 ルーディ・ラッカー/空洞地球/早川書房/1991

世界の赤道付近で待機していた7機の円盤型航空機の攻撃により、ソ連の編隊は全滅した。搭乗員の遺体は灰にされて、ソ連の首都モスクワ上空に撒かれたという。

ちなみに、空洞世界への飛行後、バード少将は命令違反を理由に査問委員会にかけられた。そして、これまでの探検記録についていっさい機密扱いとすることを誓わされ、軍により一種の

軟禁状態に置かれた。外界との接触をほぼ断られたバード少将は1957年、失意のうちにその生涯を終えている。なお、生前のバード少将はある新聞にこうコメントしている。

「新しい戦争の場合、アメリカは北極から南極まで信じられない速度で飛ぶ物体を持つ敵に攻撃されるかもしれない。地球内部の存在は凄まじい速度で移動できる手段を有している」

第3章 トロトラーが渴望した夢のレインボーン・ボーン・ライ



多大な成果を挙げたナチスの南極遠征隊



↑ナチス・ドイツの南極探検隊。アドルフ・ヒトラー（左）の命令により派遣された。

前章で紹介したバード少将の話がどこまで真実に迫るものか、筆者には判断しがたい。だが、気になるのは、ナチスに関わる「新ドイツ帝国」の記述だ。実際、ナチス・ドイツと南極に大きな関係があったことは事実なのだ。

ナチスの南極探検は、1938年「南極を獲得せよ」というアドルフ・ヒトラーのかけ声とともに開始された。その目的は、外宇宙から飛来した異星人らの超科学技術を手に入れること、超古代文明の叢智の獲得だったと噂されている。ヒトラーは、腹心の探検家アルフレート・リッチャー（1879～1963）に南極遠征を命じた。

それを受けて、リッチャーは総勢57名（探検隊員33名と船員

24名）の遠征隊を組織し、カタバルト船で南極を目指した。

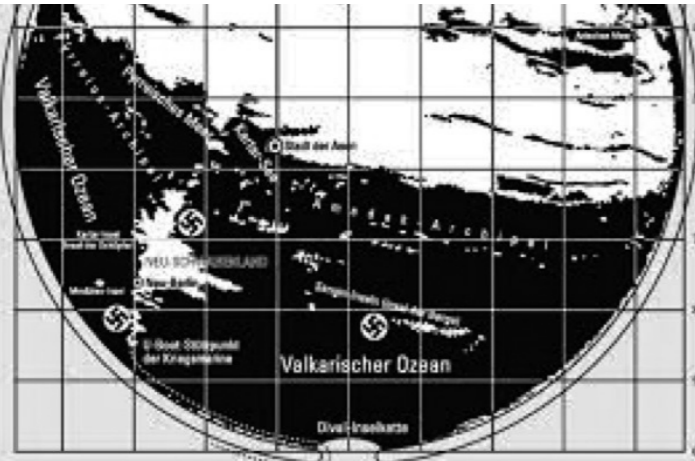
1938年12月17日にドイツのハンブルクを出発した船が、南極クイーンモランド沖に投錨したのは、翌1939年1月19日のことだ。それから3週間にわたって、船から飛び立った2機の水上機が、南極大陸の60平方キロメートルのエリアを飛び回り、1万枚以上の航空写真を撮影したのである。

また、調査対象となったクイーンモランド西部にはハーケンクロイツ型の金属片が大量に散布され、20キロメートルごとにナチス旗が投下された。そして、水上機から撮影した写真をもとに南極地図が作られた。なお、ドイツ本国で地図を分析したところ、1931年にノルウェー遠征隊が作成した「最も権威ある南極地図」が間違いだらけであることも明らかにされている。

また、遠征隊の調査によって、当時としては驚くべき事実が判明した。それまで南極は高山などほとんどない氷

原とされ、ロス地区にあるエレバス山が唯一の山だと思われていた。しかし実は4000メートル級の高山が、山脈をなしていたのである。そして、内陸部には雪の降らない地帯があり、火山活動のために凍ることのない湖、温水湖もいくつかあった。隊員のひとりはこの湖で泳いでみたという。湖の周辺には植生があり、夏であれば人間が防寒服なしでも生活できたという。

このように、リッチャー遠征隊は大きな成果を挙げたが、その後もヒトラーは毎年のように遠征隊を送り込み、南極大陸と周辺の島々に関する調査を続けた。そして、調査区域をドイツ領土とみなし、ノイ・シュワーベンラント、と名づけたのである。さらにこの「領土」を実効的に支配するため（実効的に支配していなければ国際法的に領土とは認められない）、軍事拠点の建設を企図したのだ。南極であれば各国の目も届かないため、秘密施設を設置するには絶好だったのである。



↑ナチスが作成した地球内部の地図の一部。ハーケンクロイツのマークがある箇所が新ドイツ帝国の領土か？

「私の祖国は地球上で最も進歩している。しかもある、別の存在から援助を受けているんだ。『第4帝国』に」として過去は何の意味もない。たとえば、われわれが生みだしているものはすべてが驚異的なものだ。別の世界まで飛んで

いける飛行装置や地球の中心まで進入可能な飛行潜水艦。巨大な都市を建設した。防衛システムも独特だ。また、『地中の太陽』も見える」彼のいう「別の存在」とは過去に大いに沈んだアトランティスやレムリア等の超古代文明の生き残りか？ それとも異星人の子孫ハクランなのか？

開口部が存在するのなら海の部分にあり、これは厚い氷床に閉ざされていて衛星からは見えないと考えることもできる。ナチス・ドイツが第2次世界大戦終戦後、ひそかにUFOにより南極を覗き込んだという話があるが、氷床下に開口部II通路が存在して、それが空洞内部の世界IIレインボーシティに通じていた可能性も否定できないのだ。

第2次世界大戦後、アメリカ海軍と地球内部世界との戦いが実際に行われたという話がある。アメリカ海軍は、南極に軍事基地を建設予定だったが、内部世界から飛来したUFOII円盤型航空機の攻撃を受け、撤退したというのだ。円盤型航空機は遠征駆逐艦マードック号を攻撃、デッキ上の戦闘機の半分、そして63人の船員と将校を葬つ



アメリカ海軍は新たなナチスと戦ったのか？

た。戦闘機2機も未知のビームによって撃墜されたが、それらが空母近くに墜落するまで、瞬きする時間もなかったという。

なお、2016年1月にも南極でUFO目撃事件が起きている。アト力湾に面したノイマイアー地区付近で、ノルウェーの観測隊員が前方の山並みの上空を低くよぎるUFOを目撃したのだ。それはいわゆるアダムスキー円盤型で、上部がドーム構造、中央付近には白色のライトらしきものを光らせて飛行していた。数秒後、UFOは山の背後に姿を消した。

これらの円盤型UFOは、空洞世界の住人ハクランの科学力を用いて、ナチスにより開発されたものなのか？

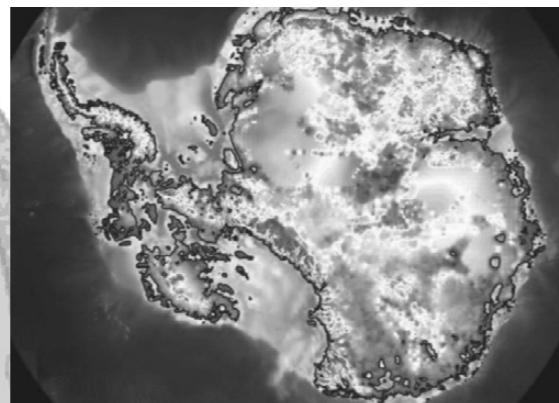
元ナチス・ドイツの親衛隊大佐が某人物に明かしたことは、

「私の祖国は地球上で最も進歩して

いる。しかもある、別の存在から援助を受けているんだ。『第4帝国』に

とって過去は何の意味もない。たとえば、われわれが生みだしているものは

すべてが驚異的なものだ。別の世界まで飛んで



いける飛行装置や地球の中心まで進入可能な飛行潜水艦。巨大な都市を建設した。防衛システムも独特だ。また、『地中の太陽』も見える」彼のいう「別の存在」とは過去に大いに沈んだアトランティスやレムリア等の超古代文明の生き残りか？ それとも異星人の子孫ハクランなのか？

開口部が存在するのなら海の部分にあり、これは厚い氷床に閉ざされていて衛星からは見えないと考えることもできる。ナチス・ドイツが第2次世界大戦終戦後、ひそかにUFOにより南極を覗き込んだという話があるが、氷床下に開口部II通路が存在して、それが空洞内部の世界IIレインボーシティに通じていた可能性も否定できないのだ。



↑↑いずれも南極で目撃されたUFO。ハクランの叡智を得たナチス・ドイツの科学力によるものか？



異星人が造った伝説の都市

なお、ヒトラーは空洞世界の入り口付近に存在するといわれる、「レインボーシティ」伝説に、特に興味を持っていて

という。伝説によれば、レインボーシティとは、約250万年前に飛来した異星人の子孫、ハクランが、

南極大陸の地下に建設した都市だ。彼らは太古の地球に起こる多くの天変地異から逃れるため地底に隠棲している。そしてドイツ人は、この超人たちの直系の子孫だといふのだ。これを信じたヒトラーは、超人が有する、ヴリルのカII叡智(前号2色刷り特集で紹介)を得て世界を征服し、同時に永遠の生命をも入手するという野望を抱いた。そして、そのハクランの拠点は当時、未知の大陸だった南極にあるのだ。

レインボーシティII南極説の根拠は1930年代に書かれた「ヘファリン文書」と呼ばれるレポートにある。それはウィリアム・ヘファリンとその妻グラディアスが、南極の氷底にあるレ

インボーシティ(虹の都)で暮らした体験記である。文書によると、都市は全部で7つあり、赤の都市、青の都市、緑の都市など、虹の7色にたとえた名前前で呼ばれていた。「レインボーシティ」はその総称である。各都市は6層から成り、グラスファイバーのような半透明の物質で建設され、光源は人工照明のほかに、太陽光を巧みに採り入れていたという。この都市にはまた、異星人の古代の叡智も保存されていた。ちなみに、地球内部の世界の地図として、ナチスが作成したとされる資料が現存しているが、これによると地図の下に見える島嶼のいくつかはハーケンクロイツがある。これも表世界同様ナチスの領土なのか？ だとすれば、ナチスはハクランとのコンタクトに成功して、本当に「新ドイツ帝国II第4帝国」を築いたのかもしれない。

第4章 地球内部の空間は異世界なのか？



あのスノーデンが告白した驚愕の事実とは？

太陽系内の惑星における、幽体離脱（アストラル・プロジェクトン）による調査を行っているカナダの研究者リチャード・A・グリーンによると、地球内部は次のとおりである。

——空洞で中心にはボールのようなものが浮いている。このボールは結晶化した物質で、未発見の元素でできている。これが地球の重力の源泉であり、また内部世界の光源にもなっている。太陽系内の他の惑星も中心部にはこのような球状物質が存在し、それぞれの惑星を軌道に保つ役割を担っている。また、地球内部には表世界の各地に通じる数々の通路がある。主要な通路

は、南極と北極にある開口部である。

グリーンは、1977年にアメリカの「ワシントン・ポスト」紙に掲載された、日本漁船が釣り上げた体長約9メートルもある恐竜のような生物の死体、いわゆる「ニューネッシー」も、内部世界から現れたと推測している。ところで、読者はアメリカのエドワード・J・スノーデンをご記憶だろうか？ NSA（国家安全保障局）およびCIA（中央情報局）の元局長だ。彼はまた、NSAで請負仕事をしてきた、アメリカのコンサルタント会社「ブーズ・アレン・ハミルトン」のシステム分析官として、合衆国連邦政府



↑現在、ロシアに亡命中のエドワード・スノーデン。地底人の存在を暴露して、世界的に名を知られた（写真＝アフロ）。



↑数学者レオンハルト・オイラー。空洞地球実在論者である。

太陽の軌道に入



内部に太陽がある同心球の地底世界は実在するか？

これまで示したように、仮に内部に太陽がある同心球の地底世界が実在するならば、極地で目撃された未確認の陸地の謎は解ける。また、この開口部が衛星や宇宙船から認識困難であることも、そのサイズが想定されたものより小さいことから了解できる。

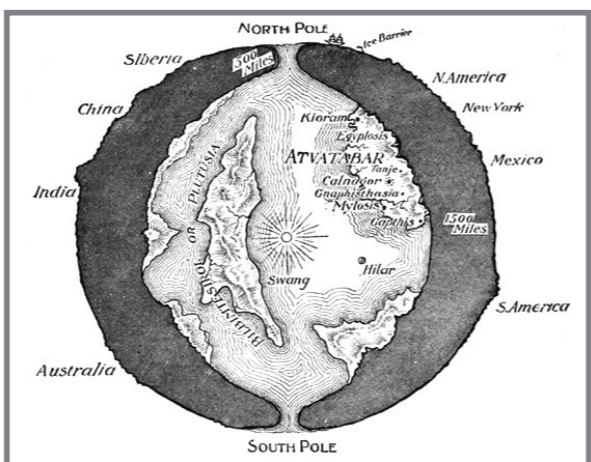
地面を這うアリのようなものでしかない、とも語っている。

ったりする、乗り物だ。そして、その「乗り物」を操る存在については、弾道

による情報収集活動に関わった。スノーデンは2013年6月に、香港で複数の新聞社（ガーディアン、ワシントン・ポストおよびサウスチャイナ・モーニング・ポスト）の取材やインタビューを受け、これらを通じてNSAによる個人情報収集の手法を告発したことで、全世界に知られた。

その後、アメリカから逃亡し、現在ロシアに滞在中の彼は、次のように証言している。

「UFOの正体についてアメリカ政府公式見解として発表されてきた。風船説、や、自然現象説、はもはや無理がある。いくつかの秘密文書は、われわれよりはるかに高度な知的生命体の存在を示している。最も確実で不可解な観測は、海底の熱水噴出孔へ入ったり



↑空洞地球のモデルのひとつ。
→19世紀末に描かれた空洞地球内の想像図。

↑ガウスが証明した定理に基づいて計算すると、地球内部の空洞には重力が存在しないというが……。

「フロログ」で触れたエドモンド・ハレーは、極地方の変則的な磁気変動を説明するために地球空洞説を考案し、イギリス学士院でこれを発表した。これは「水星と同じ直径の中心核と、金星および火星と同じ直径で、厚さ約500マイルの同心球状のふたつの内核からなる空洞地球」というものだった。これらの核同士は空気の層で切り離され、それぞれ



地底世界には重力が存在し得ないのか？

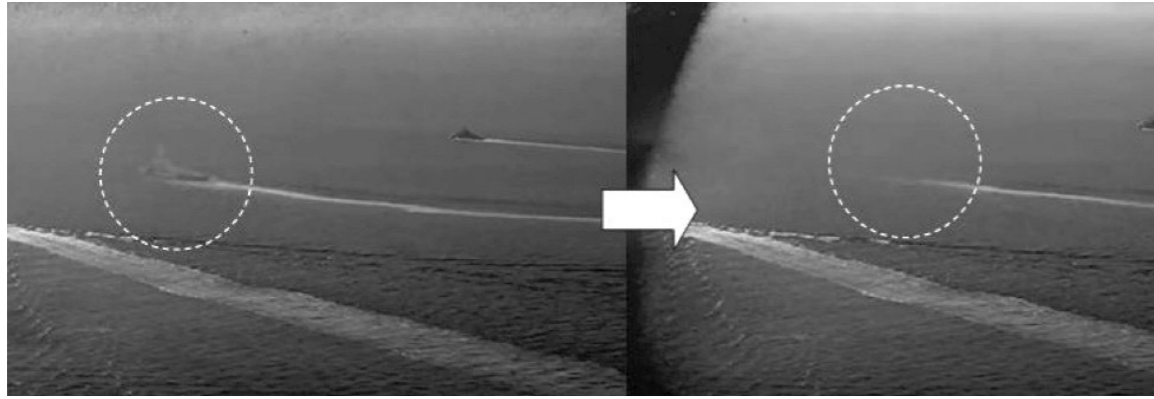
の核はいずれも磁極を有し、さらに異なる速度で自転しているとした。また、この説では「地球内部は明るく、おそらくは居住可能であること」、さらに「そこから出てくる発光性ガスによって、ゆめくオーロラが生じる」とした。そして、ドイツの数学者レオンハルト・オイラー（1707～1783）も、地球内部の高度な文明を照らす、1個の「内部太陽」

しかし、万有引力の法則による重力理論が正しければ、ドイツの数学者カール・フリードリヒ・ガウス（1777～1855）が証明した定理を用いて計算すると、球形の空洞内部には重力が存在しないことがわかる。つまり、地表赤道上の遠心力は1キログラムの物体に対し0.034Nと、

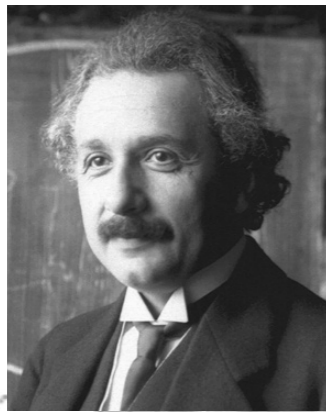
地球表面の重力と比較して微弱であることから、遠心力を考慮しても地球の空洞内部にある物体は地表にとどまらず、ほとんどが引力により内部の中心太陽に吸い込まれることになるのだ。これでは地底に文明世界は存在し得ない。前章まで紹介してきたヤンセン親子やバード少将の地底世界探検の記述とは、まったく矛盾すること

この見地から、地球の内部世界に人類等が生息する環境の存在が許されるためには、万有引力の法則、一般相対性理論、また現在の重力子の交換による重力理論等が間違っていることとなる。となると、現代の科学理論は大きな見直しを迫られる。

ただし、仮に中心太陽が負の質量の物質で構成されていると考えた場合は別だ。この場合、正の質量との間に斥力が働くため、空洞内部の物質はその表面に押しつけられ、地表の重力と同じ働きをする可能性があるのだ。しかし内部太陽の負の質量の影響により、地球表面の重力はかなり小さくなってしまふ。



↑ステルス効果を目的としたいわゆる「フィラデルフィア実験」で、物理的にも消滅したエルドリッジ号。



↑バミュータ・トライアングル。ここも異次元世界の入り口か？
↑統一場の理論を唱えたアルベルト・アインシュタイン博士。

実験開始直後に駆逐艦がレーダー画面から姿を消す、ここまでは実験参加者たちの予定通りであった。しかし実際には



護衛艦は、レーダー画面どころか物理的にも姿を消してしまっただ。

奇怪な出来事はまだ続く。消えたはずのエルドリッジ号が、なんと約2500キロメートル離れた、バミューダ州のノーフォークの港に姿を現したのだ。さらに数分後、またもや発光体に包まれた護衛艦は、再びフィラデルフィアへと舞い戻ったのである……。

バード少将も南極でのデイープフリーズ作戦では、白い不思議な霧が機体を包んだと述べている。このことから、少将の乗機は両極に発生するプラズマの作用によって、別の天体が異次元世界にレポートした可能性もある。

ドイツの理論物理学者アルベルト・アインシュタイン（1879～1955）は、重力と電磁場を統一する統一場の理論を考えていた。それによれば、強力な電磁場は空間の特性を変化させることができるという。だが、彼も参加したというフィラデルフィア実験において、空間の特性が変化するためには、統一場理論によっても莫大なエネルギーが必要になってくると考えられる。そのため同実験には、現代科学でも解明できない未知の現象が関係していると思えないのだ。

なお、これと似た現象が、バミュータ・トライアングル（アメリカ、フロリダ半島の先端と、大西洋上のプエルトリコ、イギリス領バミューダ諸島を結ぶ三角形の海域）でも起こった。

パイロットがバハマ諸島のアンドロス島からアメリカ、フロリダ州のパームビーチに行く途中でのこと。離陸直後、パイロットはバミュータ・トライアングル海域上空を飛行中、幅が約25キロメートルの楕円形の雲に遭遇した。迂回できなかったため、航空機は雲に突入。そのとき、前方の雲に小さな穴が見えた。この穴も急速になくなるうとしていた。入ったとき、穴は長さ約1.5キロメートルにわたって貫通するトンネルになっていた。それを抜けると、奇妙な緑色をした煙霧が周囲に立ち込めていた。さらに、機内のあらゆる計器類が誤動作していた。

徐々に霧が晴れると驚くことに、眼下にマイアミが見えた。パームビーチの空港に着陸すると、いつもより30分も早く到着したことがわかった。最高速度が時速313キロメートルの航空機が、402キロメートルの距離をわずか45分で飛んだのである。これは途中で彼の乗機がレポートしたとは思えない現象だった。

緑色に光る霧はエルドリッジ号のときと同じく一種のプラズマで、それにより異空間が姿を現したのだろうか？

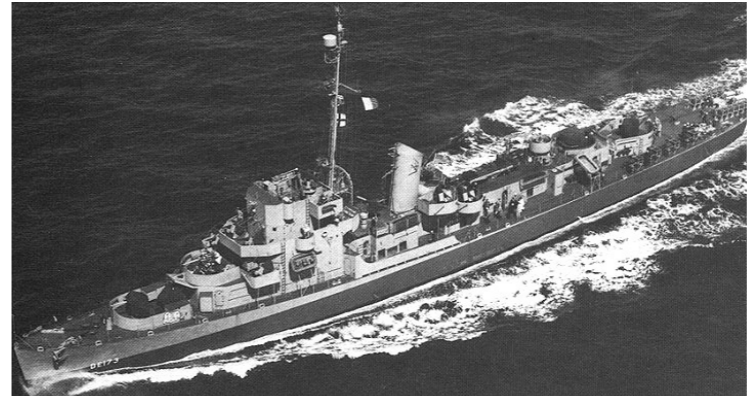
地球空洞論のもうひとつの難点は、イギリスの化学者・物理学者のヘンリー・キャヴェンディッシュ（1731～1810）が地球の質量を計算し、地球の平均密度に關し1立方センチメートルあたり5.5グラムという数値を求めたことだ。地表の岩の密度1立方センチメートルあたり2.8グラムという数字と比べると、地球内部が空洞という可能性はこれで否定される。

この実験は「磁場発生装置テスラコイル」を使い、強力な磁場を発生させ、駆逐艦をレーダーや磁気機雷や魚雷から透明化するというものだった。1943年10月28日、第2次世界大

戦さなか、ペンシルベニア州フィラデルフィアの海上に浮かぶエルドリッジ号を使って、大規模な実験が秘密裏に行われた。テスラコイルの高周波によってレーダー波を無効化するための装置として、同号の船内には多くの電気実験機器が搭載されている。そのスイッチを入れると強力な磁場が発生し、船の姿がレーダー画面で認められなくなった。これは、レーダー波がエルドリッジ号へ向けて照射されたものの、反射されなかったことを意味する。

ところが、実験は成功したかのようには見えなかった。同時に奇妙な現象が起る。実験開始とともに海面から緑色の光が湧き出し、次第にエルドリッジ号を覆っていったのだ。次の瞬間、艦は浮き上がり、発光体は幾重にも艦を包んだ。そして、みるみるぼやけた艦の姿は、やがて人々の目の前で消えた。

Extra Terrestrials Inside the Earth, and the Arrival of the Outer Terrestrials/1980



↑アンドレイ・サハロフ博士。 ↑アメリカ海軍の駆逐艦エルドリッジ号。



こう見てくると、空洞世界はやはり地球内部には存在し得ないのか？もしかすると、地球の両極に発生する強力なプラズマの影響により、極点において、開口部ではない別の形で異世界への通路が開くのかも知れない。そう、かつてアメリカ海軍が行った護衛駆逐艦エルドリッジ号に対する強力電磁場を用いた、いわゆる「フィラデルフィア実験」のときのように……。



異世界への道を拓く超強力な電磁フィールド

戦さなか、ペンシルベニア州フィラデルフィアの海上に浮かぶエルドリッジ号を使って、大規模な実験が秘密裏に行われた。テスラコイルの高周波によってレーダー波を無効化するための装置として、同号の船内には多くの電気実験機器が搭載されている。そのスイッチを入れると強力な磁場が発生し、船の姿がレーダー画面で認められなくなった。これは、レーダー波がエルドリッジ号へ向けて照射されたものの、反射されなかったことを意味する。

ところが、実験は成功したかのようには見えなかった。同時に奇妙な現象が起る。実験開始とともに海面から緑色の光が湧き出し、次第にエルドリッジ号を覆っていったのだ。次の瞬間、艦は浮き上がり、発光体は幾重にも艦を包んだ。そして、みるみるぼやけた艦の姿は、やがて人々の目の前で消えた。

Extra Terrestrials Inside the Earth, and the Arrival of the Outer Terrestrials/1980

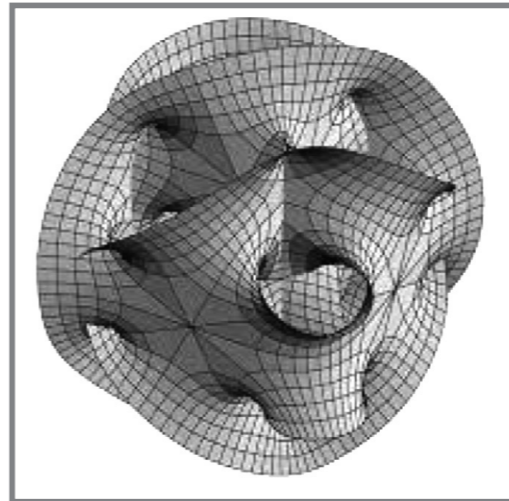
エピソード 超弦理論が明かす空洞世界の謎



数多く存在する異次元世界は われわれの世界のすぐ隣に広がる

アメリカの理論物理学者リサ・ラン
ドール博士によると「私たちの暮らす
3次元世界は、人間の目には見えない
5次元世界に組み込まれている、とさ
れている。この世界は縦・横・高さの
3次元で、時間軸を加えると4次元に
なる。3次元世界は時間軸を加えた5
次元世界にある膜のようなものであり、
私たちはその膜にぴったりと張りつい
ているというわけだ。このことから、
私たちが地球で普段経験している3次

元の生活空間とは異なった、別世界
の存在が考えられる。すなわち、3次
元世界以外にも、異なる次元世界がい
くつかあるかもしれない」
博士はさらに、高次元世界の存在は
本当に矛盾のない、科学的な事実、に
思えるということだ。それは見えない
が、異次元世界がわれわれの3次元世
界の、すぐそばにある、と考えられる
と続ける。博士は1998年、マサチ
ューセツ工科大学の教授として素粒



↑コンパクトにたたまれた6つの次元「カラビ・ヤウ多様体」。



↑マントル部分と重なった地球内部の異世界。

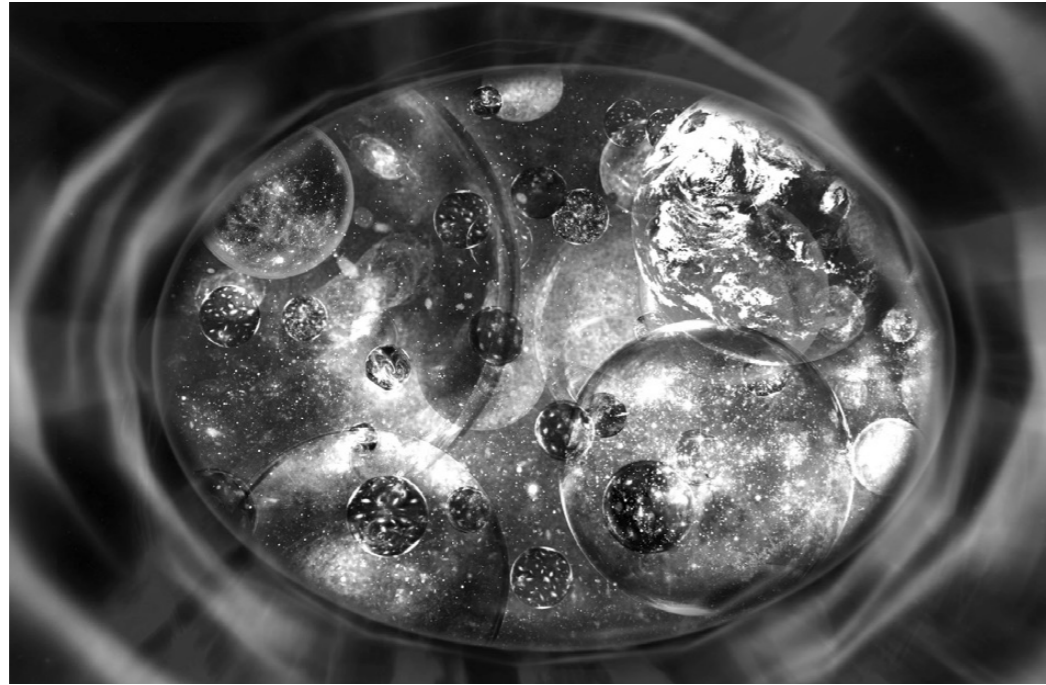
子の研究をしていたとき、原子核を構
成する素粒子の中に、「この世界から
姿を消すもの」があるという矛盾にぶ
つかった。「なくなるはずのない素粒
子が姿を消すのはなぜか？」と考えた
とき、われわれの世界を取り囲む別の
次元があると仮定すると矛盾が解決す
ることに気づき、異次元の形を特定
する研究を始めたという。以降、さま
ざまな可能性を検討した結果、異次元
世界がわれわれの3次元世界を取り巻
く、観測不可能なほど無限の広がり
を持つ可能性のある、巨大な時空である
ことを理論上、検証している。

物理学上の仮
説のひとつであ
る、超弦理論。
では、この世界
は空間の9次元
と時間の1次元、
計10次元の時空
で構成される。こ
ういう場合、この
穴から異次元
空間の一部として存在する地球内部
世界に入りこんだのかもしれない。
確かに両極に地球の内部世界に通じ
る開口部があるという話は、現在の科
学理論を否定するものだ。まして、そ
の世界に超人類が住むという話に至っ
ては、だ。多くの証言にも関わらず、
真実は依然、謎である。



新ドイツ帝国「ナチスが トンネルから現れる日」

しかし、これ
が地球の内部に
われわれのもの
と異なる世界が
存在している、地球の両極からその世
界に移動できることの証明になるの
か？ 現時点ではその証明はなかなか
むずかしいだろう。ただし、地球上の



空間にその異次元世界が固定して存在
するかは明確ではないにしても、同様
な物理法則が働く空間が地球内部の異

実験機器の間で行き来する光子の動き
を追跡研究している。そして、この光
子の挙動を分析して、4次元の影響が

空間に存在する
可能性は否定で
きないだろう。
ランドール博
士の主張するよ
うに、この世は
多次元世界であ
り、バード少将
らは両極の開口
部から地球の異
次元世界に迷い
込んだのかもし
れない。
最近、ドイツ、
ミュンヘンのル
ートヴィヒ・マ
クシミリアン大
学のミハエル・
ロース教授をは
じめとするドイ
ツ、イタリア、
スイスの研究者
による合同研究
チームがイギリ
スの学術誌「ネ
イチャー」で発
表した研究では、
特製のガラス製

ある場合にのみ可能となる不規則性を
突きとめたのだ。専門的には「4次元
量子ホール効果」が4次元系の影響を
予測できることが実験的に裏づけられ
たという。この4次元量子ホール効果
が、4次元空間の成立と影響を説明す
る力ギになると考えられる。
もうひとつの研究はアメリカ、ペン
シルベニア州立大学の研究者を中心に
した合同研究チームが同じく「ネイチ
ャー」誌で発表したもので、レーザー
で作られた2次元グリッド上の所定の
位置に、絶対零度、近くまで冷却され
た原子を配置し、垂直方向から電流を
流す実験が行われた。チームはこの設
定を「チャージポンプ」と呼び、原子
の反応を観察しながら電荷の流れを分
析した結果、4次元空間の影響がある
ことが示されたという。
このふたつの研究で、仮に知覚でき
なくとも、現実には4次元空間がわれわ
れの身の回りには可能性があるが示唆さ
れることになった。

これまで見てきたように、地球空洞
論者たちが主張する巨大な開口部が両
極に存在するという説は、極軌道衛星
の画像から否定されている。しかし、
北極のシベリア付近には彼らが予想し
たよりはかなり小さいながら、穴が存
在することが衛星写真より確認できる。
ヤンセン親子やバード少将、そして
ナチス・ドイツは、この穴から異次元
空間の一部として存在する地球内部
世界に入りこんだのかもしれない。
確かに両極に地球の内部世界に通じ
る開口部があるという話は、現在の科
学理論を否定するものだ。まして、そ
の世界に超人類が住むという話に至っ
ては、だ。多くの証言にも関わらず、
真実は依然、謎である。
だが、筆者は彼らの体験からして、
地球内部に空洞世界、またはそれに類
したものが存在すると考える。極地に
は、その世界とつながる、常識を覆す
何かが存在すると考える。トンネルで
表世界と接続された空洞世界。それが
地球の異次元に存在する可能性は十分
にあり得るのだ。その世界には、われ
われの科学技術よりはるかに発達した
テクノロジーを有する新ドイツ帝国が
存在するのかもしれない。
いつか「地球空洞論」が真実である
ことが立証されれば、太陽系の生成理
論や重力理論を含む現代科学は、大き
な転換を迫られる。
現在、われわれの世界はさまざまな
負の要因に取り巻かれている。われわ
れの文明が自ら瓦解する前に、地底の
空洞世界から新ドイツ帝国のラスト・
バタリオンが円盤型航空機に乗って現
れ、表の地球を席巻するのだから
うか？